

## 志筑忠雄のルーツ

松尾 龍之介

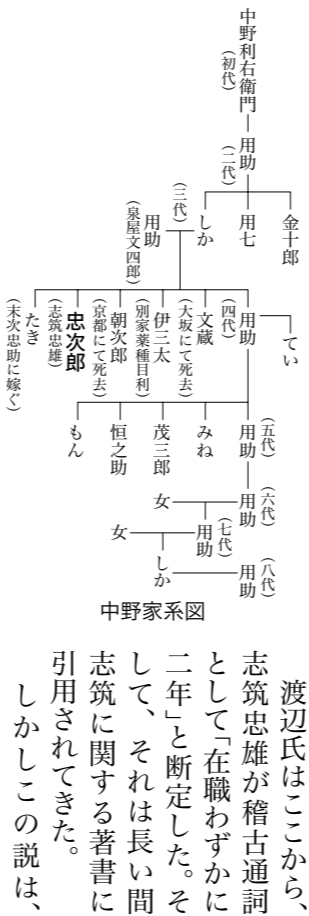
長崎が生んだオランダ通詞の中で、志筑忠雄ほど高く評価されている人物はいないようである。志筑の著書『曆象新書』は、日本人で初めてニュートンの古典力学と自然哲学を理解できたことを証明している。だから自動車もない時代に、「速力」「加速」「動力」「遠心力」「求心力」などの言葉をつくっているし、太陽系宇宙の成立に関しても独自の星雲説を編み出すなど、時代を突き抜けた存在であった。

筆者が個人的に驚いたのは、彼が球体の体積を計算していることである。その公式は蘭書に学んだに違いないが、それを実際に応用したところがすごい。志筑忠雄は有名なわりには、その実家や家系に関する史料が極めて乏しい。

まず志筑の史料の第一に挙げられるものとしては、渡辺庫輔氏の『阿蘭陀通詞志筑氏事略』がある。初代・志筑孫兵衛からはじまって、幕末の志筑龍三郎に到るまで、代々志筑家の阿蘭陀通詞に及んでおり、中でも志筑忠雄に関して最も多くの頁が割かれている。

志筑忠雄の項目は、彼が亡くなってから四十三年後の嘉永二己酉（一八四九）年に書かれた、志筑龍太の「上書由緒書」の引用にはじまる。

「凌明院様御代安永五申（一七七六）年、養父跡職被仰付、稽古通詞罷成、全六四年（一七七七）病身罷成候二付、御暇奉願、文化三寅（一八〇六）年七月九日病死仕候」



渡辺氏はここから、志筑忠雄が稽古通詞として「在職わずかに二年」と断定した。そして、それは長い間志筑に関する著書に引用されてきた。しかしこの説は、

あることが判明した。さらに、同じテーマを扱った先駆的研究として、森岡美子氏の「三井越後屋の長崎貿易経営」(昭和三十八年)が挙げられていたのでそれも入手した。そしてそこに森岡氏がつくられた中野家系図を見出したのである。

しかし「忠次郎」に当たる個所には「忠治郎」という字が振られており、森岡氏はそれが「中野忠次郎」とは気づけなかったと思われる。もしその時点で気づかれていたら、すでに志筑の家系に関する論文が発表されていたはずである。

また、その家系図に添って渡辺庫輔氏が調査された中野家の人々を調べ直すと、次のようなことが判明する。すなわち「中野浄春」は初代利右衛門(忠次郎の曾祖父)、「中野金十郎」は二代目用助の長男(忠次郎の伯父)、「中野用助母」は初代利右衛門の妻(忠次郎の曾祖母)、「中野用助」は用助を最初に名乗った二代目浄貞(忠次郎の祖父)と、それぞれに該当することがわかる。したがって「忠次郎は用助の孫ではなからうか」という渡辺氏の推測は的中していたことがわかる。

二代目用助には三人の子供があったが、男子は二人とも早世し、残った女子「しか」(忠次郎の母)は養子を迎えた。相手は泉屋甚次郎の次子「文四郎」(忠次郎の父)で、彼が三代目用助を継ぐ。この二人には六人の子が生まれ、五人まではすべて男子、最後が女子「たぎ」で、忠次郎の妹に当たる。五人の男子のうち長子が四代目を継ぎ、次男は大坂(信濃屋)に働きに出て死去し、三男は葉種目利の株を買い別家を立てた。四男は京都越後屋本店に奉公中に亡くなっている。

こうしてみると家に残ったのは、長男と五男の忠次郎と一人娘「たぎ」の三人になる。彼らが両親から大事に扱われたのは容易に想像される。二十年間ほとんど家に籠もるようにして『曆象新書』の執筆に没頭するなどは、なによりも家族の暖かいまなざしがなければ成し遂げられるものではない。また、妹の「たぎ」が志筑忠雄の一番弟子・末次忠助に嫁いでいるのも興味深い。末次忠助は延宝四(一六七六)年、お取り潰しになった長崎代官末次平蔵の一族と思われる。

ついでに言及すれば、森岡氏の「三井越後屋の長崎貿易経営」には、渡辺氏の研究を凌ぐ中野家に関する史料が含まれており、今後の志筑忠雄の研究に欠かすことの出来ないものと筆者は信じて疑わない。

森岡氏によれば長崎の落札商人の興亡は激しく、「明和六年と、三十年後の享和元年との商人の名前を比較してみると、百二十名中、十名しか共通した名前が見つからない」と言う。かくも厳しい競争の中で、中野家が八代に渡り営業を続けることができたのは、ひとえに三井越後屋

二〇〇六年十一月、長崎歴史文化博物館で催された「志筑忠雄没後二〇〇年記念国際シンポジウム」において、新たな検討が加えられた。

原田博二氏は「地役人分限帳」に拠る調査から、志筑忠雄が天明二(一七八二)年まで稽古通詞を勤めたことを報告され、さらにイサベル・田中・ファン・ダーレン氏によれば、それはさらに伸びて天明六(一七八六)年までの十年間を稽古通詞として在職した可能性もあり得るということであった。「志筑忠雄」はいわばペンネームで、「中野忠次郎」が実名であり、『阿蘭陀通詞志筑氏事略』には、

忠次郎は文化三丙寅年(一八〇六)七月八日没。光永寺過去帖、丙寅の条に、「大什堂徳声、外浦町、中野忠次郎事、行年四十七歳、七月八日」といつてある。

また、光永寺過去帖から中野氏を拾うに、享保十二丁未(一七二七)年に「外浦町、中野浄春」、享保十八癸丑(一七三三)年に「外浦町、中野金十郎」、寛保三癸亥(一七四三)年に「外浦町、中野用助母」、延享二乙丑(一七四五)年に「外浦町、中野用助」がある。忠次郎は丙寅に四十七歳であるから、逆算して宝暦十庚辰(一七六〇)年の生まれである。用助の孫ではなからうか。用助は三井組用達であった。

以上が渡辺氏が残した中野家に関する史料のすべてである。しかしこれだけでは、ここに登場する人々と志筑忠雄とがどんな関係にあったのか見当がつかない。筆者は、渡辺氏の「用助が三井組用達である」という指摘を手掛かりに、東京の三井文庫に江戸時代、長崎に進出する三井に関する資料があれば何でもいから送って欲しいと申し出た。するとまもなく、『三井文庫論叢』第十二号(昭和五十三年)が届けられた。

中に賀川隆行氏による「化政期の越後屋長崎方の流通構造」があり、中野家は、越後屋京都本店の資金で輸入反物を落札する本商人(五ヶ所商人)で、「中野用助」とは個人名ではなく、中野家代々襲名された名前での後ろ盾があったからであり、またそうでなければその実家が西奉行所の目と鼻の先にあつたことなど考えられない。

最後に、筆者が三井文庫から取り寄せた『中野用助系図』本(一四九一―三八)のコピーを比較検討したところ、若干の誤りが見受けられたので、補訂したものを「中野家系図」として掲げる。なお家系図に登場する泉屋文四郎をはじめとする人物についての詳細は、後考を俟つことにする。(洋学史研究会々員)

### 風信

一、十月九日、今年の「長崎くんち」の「お上り」も無事、賑やかに終わらせて戴きました。  
一、十一月三日は文化の日。「霜月」今年も早い足どりで暦の数がなくなり、後はもうすぐ師走ですね。元気に今年も無事に終らせて戴きたいと思っております。

一、さて先日、増田高彦氏の訃報に接しました。増田氏には戦後すぐから長崎学の再興に大変お世話になりました。場所は片淵の「心田庵」でした。週に一度は渡辺庫輔・永島正一両先生を中心に賑かに長崎学の話をさせて戴きました。この時、「心田庵」の建物・庭園の保存を力説されたのが増田氏でした。考えると之が現在の長崎学学習の第一歩だったと思ひ、増田氏の功績を今にして緊々と感じさせられるときがありました。御冥福をお祈り申し上げます。

一、長崎の文化とは、一体何でありましょう。私が最初に先輩方より命じられた事は昭和三十年四月、長崎市立博物館の復興でした。長崎の博物館は日本最初の三大博物館の創建に始まっているそうです。当時は「博物館」と言い、現在の日本銀行長崎支店のある炉柏町の場所だったそうです。

一、長崎の特色ある文化の第一は「長崎の美術工芸」であると言われ、次いで「長崎の食文化」があるので私に其の研究を始めなさいと言われました。次に長崎工芸品の中で未だ研究されていない部分に「鼈甲」があるので、其の研究もするようにとの指示もありました。ちょうど其の頃、奈良の正倉院の方より関根真隆・木村法光両先生が来崎され、正倉院の玳瑁を研究するので奈良の正倉院研究所に来るようにと御招きを受けました。さっそくよるこんで参加させて戴くことに致しました。こうして私の「玳瑁考」は、純心大学博物館より発刊して戴きました。

注 鼈甲と玳瑁は別種の亀で、鼈甲は薬用に使用する亀で、玳瑁は、細工用に使用する亀だそうです。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一―五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 2F

